

第 68 回国際理解・国際協力のための高校生的主張コンクール東京都大会 特賞原稿 2

日本大学豊山高等学校

池田 直樹

課題②

日本における持続可能な開発目標（SDG s）の達成に向けて、私たちが国連とできること。

副題

お菓子から始める SDG s

期末テストが終わると、空腹に襲われました。「早く家に帰ろう」と思った矢先、社会科の先生に「午後からの SDG s の勉強会に参加してみないか」と誘われました。その勉強会はお菓子が食べられるとのことで、空腹だった私はお菓子の誘惑に駆られ参加することにしました。しかし、この勉強会は、私のこれまでの日常、勉強の視点や目的を一変させるほどに衝撃的なものでした。

勉強会は、参加者 12 名を高所得者 2 名、中所得者 4 名、低所得者 6 名に分けることから始まりました。これが世界に住む人々の所得格差の現状だそうです。どの所得国に生まれるかはじゃんけんで決めるとのことでした。私は、「高所得国に生まれたい」と本気で思い、じゃんけんをする手に力が入りました。しかし、結果、私は低所得国の立場になりました。高所得国には二人では食べきれない量のお菓子。中所得国には一人一枚ずつの煎餅が配られ、私の属する低所得国は六人で二枚の煎餅が配られました。私たち低所得国はこんな少ない量を分け合わなければならないのです。先生は「これが世界の食糧事情、飽食と飢餓の現実です」と言われました。私はたとえ、お菓子の体験であっても、不平等と不条理の中で生きている世界の国々・人々のことを思わずにはいられませんでした。世界の不条理さに憤りを覚えるほどでした。その後、先生は低所得国のお菓子の半分ほどを捨てるそぶりをされました。飢餓で苦しむ人々がいる一方で、高所得国ではまだ食べられるにも関わらず捨てられる食糧、つまり食品ロスがこれほどまでにあるということです。この現実には私の胸を痛めました。その痛みの中でこうした実情をもっと学び、何かできることはないかと考えました。

国連が掲げる持続可能な開発目標 SDG s 17 項目の中には「食」に直接関係する目標が多いことに気づきます。貧困、飢餓、健康と福祉、教育、不平等、生産と消費、気候変動などです。つまり、食に関する取り組みが相乗効果を生み、他の目標にも波及するのではないかと強い確信を持ったのです。世界には人口 78 億人の一人一人がお腹いっぱい食べられる量の食糧 40 億トンが存在します。しかし、飽食を謳歌する国がある一方で、飢餓で苦しむ国、世界の 5 歳未満時の約 2 割、1 億 4 千万の子供達が日常的に栄養を十分に取れない状況にあります。栄養不足は身体だけでなく知能の発達を遅らせ、生涯に渡って

悪影響を及ぼします。世界の食糧が公正に分配されれば、世界中の全ての人がお腹を満たすことができるのです。「食」の問題の本質的な原因は分配の問題なのです。それ故に、先進国にいる私たちは、日常生活の中の意識の改善が必要です。世界では食品ロスを含む食品廃棄物が年間 13 億トン、生産量の三分の一が廃棄されています。日本ではまだ食べられるのに捨てられる食品が一年間に 612 万トン、日本国の一人一人が毎日お茶碗一杯分の食べ物を捨てている計算になり、しかも食品ロスの半分は家庭からであると環境省の報告にもあります。つまり、私たちの意識が大切です。私たちが残す食べ物、廃棄される食品は、貧困に喘ぐ国々、食糧不足で飢餓に苦しむ国々、人々にとって命をつなぐ重要な食糧なのです。

SDG s の勉強会への参加は、私の世界の見方を変え、国連の活動に関心を持つきっかけになりました。国連は国際社会を多角的に考察し、公正と正義の道を築く活動を展開しています。私たちは国連とともにありたいと思います。同じ地球に生きる人々に思いを馳せ、理不尽にも厳しい状況に置かれている国々、人々に共感することから始めます。高校生として、生徒会の一員として啓発活動に努め、エシカルな消費を心がけ、行動を起こす仲間を増やします。生徒会新聞で SDG s に関する特集を組み、また文化祭で学校内外の人に情報を伝える活動を企画しています。「誰かがやるのだろう」ではなく、「私は私にできることをやる」という考えが持続可能な社会を作るのだと確信します。